

禮部事始

秋坪先生所賜

文彙

大槻文庫

黃尾秋坪藏

明治二年 初夏 於 因 爲 所 始

洋学文庫
 文庫 8
 A 212



時
18
12



鸕齋杉田朱生肖像



大槻文庫



大瀧實



蘭學事始
天真樓藏

明治二年己巳新刻

蘭學事始

天真樓藏版



先生名ハ翼字ハ子鳳俗稱ハ玄白一ニ九幸ト號ス父
ハ甫仙ト云若州侯ノ醫負ニシテ母ハ蓬田^{ヨモキタ}玄孝ノ女
ナリ先生誕レシ時其母難産ニテ分娩ノ後終ニ絶命
ニ及リ傍人皆産婦ノ暈倒ヲ救ハムトテ初生兒ノ事
ニ及ハズ且難産ニテ分娩セル兒ナレハ定メテ死セ
ル者ナラントテ布片ニ包ミ之ヲ蓐側ニ置ケリ然シ
テ後之ヲ顧ルニ全命ナリ且男兒ナリケレバ人々再
ヒ愁眉ヲ開キ乳哺養育シテ漸ク成長ニ至レリ甫メ
十七八歳ノ時牛山若州邸内父ノ膝下ニ在リテ之ニ
告テ曰ク不肖男此齡ニ至ルマテ疎慢ニ日ヲ消セリ

願クハ今ヨリ新ニ良師ヲ求メ本業ヲ習學セント大
人欣然トシテ曰ク余汝カ其言ノ出ツルヲ待テリト
此ニ於テ當時二本榎ニ住セル官醫西玄哲ト云ヘル
人外科ニ名アリケレハ乃チ其門ニ入り從學シ日々
怠慢ナク風雨ヲ厭ハズシテ遠路ヲ往來セリ又本郷
ニ俗稱宮瀬三郎右衛門ト云テ龍門先生ト號セル儒
人アリ乃チ其人ニ從ヒテ經史ヲ學ヒ之ヲ研精セリ
二十五歳ニシテ侯ヨリ部屋住料五人口ヲ賜リケレ
ハ此時大人ニ乞フテ外宅セリ且月俸五人口ヲ以テ
父ノ給ヲ待ツヘカラスト約シ遂ニ願父ヲ呈シ許允

蘭學事始 序
二 天眞樓藏
ヲ得テ日本橋通四丁目ニ偶居セリ画工楠本雲溪ノ
鄰家ナリシト云爾後箔屋町堀留町等ニ轉居セリ是
レ火災ニ遭ヒシカ故ナリト云三十七歳ノ時父甫仙
君没シ給ヒケレバ此時ヨリ新大橋ノ中邸ニ住居シ
テ蘭學創始ノ舉アリ四十四歳ニテ再濱町竹本藤兵
衛ト云士人ノ地ヲ借り之ニ外宅セリ是ヨリ家學ヲ
全備セシメントシ奕世傳來ノ和蘭瘍科ト唱フル書
ヲ檢點スルニ何モ彼邦人ヨリ譯官ヲ以テ聞出セル
者ノミニシテ取ルニ足ズ又漢土ノ外科書ヲ遍ク涉
獵スルニ疎漏ニシテ何レニ適從センコトヲ知ラス

是ニ因テ新ニ日本一派ノ外科ヲ創建セント思惟シ
漢土ノ書籍中外科ニ係ル確言要語ヲ逐一撰集セン
トヲ同藩ノ一奇士青野小左衛門ト云人ニ語リケレ
バ士其本業ニ切ナルヲ感賞シテ其撰書今如何程成
レリヤト問フ否未タ其草ヲ起サス唯志ヲ發セシ迄
ナリト云ヒシニ士大ニ之ヲ勵マシテ曰ク足下既ニ
斯ル大業ヲ起サントシ何ヲ以テ猶豫シ給フヤ是レ
明日ヲ期スベキトニアラス宜シク今日ヨリ筆ヲ把
リ給ヘト其言ニ深ク服シテ即夜ヨリ業ヲ始メ瘍科
大成ト題セル書數卷ヲ撰集セリ其後和蘭原書内景

蘭學事始序
圖ヲ見テ臟腑筋脉ノ漢說ト大ニ異ナルヲ疑ヒ刑屍
ヲ解剖シテ之ヲ其圖ニ徵スルニ其吻合符節ヲ合ハ
ス力如キニ驚キ之ニ心服シ遂ニ憤然トシテ洋書翻
譯ノ業ニ從事シ此學ヲ首唱シ給ヒケレハ其名海外
ニ轟キ治ヲ請フ者門前ニ市ヲナシ晩年ニ及ンテ
台府ニ拜謁ヲ許サレ八十五歳ニシテ館ヲ捐テ給フ
右ハ盤水大槻先生ノ筆紀シ置レシヲ其マ、寫出
シテ以テ序文ニ代フ

明治二己巳年正月望 不肖曾孫杉田擴玄端謹識

蘭學事始序

是書ハ吾四世ノ祖鷓齋先生ノ遺編ナリ粵
ニ先生ノ時ヲ稽ルニ世ノ士君子耳目ノ及
ブ所未タ速カラズ縱ヒ博雅ノ人ト雖モ口
ヲ開キ譚スル所ハ惟唐竺ノミニシテ曾テ
泰西ニ渉ル者ナシ偶々一二之ニ渉ル者ア
ルトモ僅ニ常言瑣語ニ通シテ止ミ奧旨ヲ
發シ以テ實用ニ施スヲ聞カス先生英邁ノ
資ヲ以テ超然流俗ヲ抜キ二三子ト謀リ首

トシテ泰西ノ學ヲ唱一啣嚙ノ書ヲ繕キ專志研究實ニ畢生ノ全カヲ盡セリ遂ニ前哲未曉ノ學ヲ啓シ千古未洩ノ竒ヲ闡シ二三子ト共ニ此學ノ鼻祖トハ為リニキ爾來諸名哲其緒ヲ繼キ學規漸ク拓ケ次テ迄今泰西諸國本邦ト通好セシヨリ諸般ノ學科一時ニ勃興シ諸國ノ載籍所在アラサルハ無ク殆ト戸學人習ノ盛ニ至レリ嗚呼今ノ學ヲ為シ易キ此ノ如クナルモ潮リテ先生ノ

古ヲ見レハ彼ノコトク難キナリ抑天下ノ事皆ナ最勤苦ヲ歷ルノ後ニシテ始テ簡易ヲ得レハ今ノ學ヲ為シ易キ此ノ如キモ畢竟先生輩ノ賜ニアラスト云フヲ得ズ是書ハ只先生ノ漫筆ナレト古人苦心ノ一斑ヲ窺フベケレハ或ハ懦夫ノ志ヲ立テント思ヒ且祖先ノ功勞ヲ没セザルハ子孫ノ務メナリト思フテ茲ニ刊行シヌ

明治二己巳年孟春

四世孫杉田鶴廉卿謹撰

蘭學事始上之卷

今時世間ニ蘭學といふ事専ら行ハれ志を立つる
 人ハ萬ク學ヒ無識なる者ハ湧リヨこれを誇張す
 其初を顧ミ思ふヨ昔ノ翁ウ輩二三人不圖此業ヲ
 志を興セシ事なるヲとや五十年ノ近ノ今頃々々
 迄ノ至るヘシハ露思ハざリヨ不思議ヨも盛
 んヨなりノ事なり漢學ハ遣唐使といふものを異
 朝ヘ遣トされ或ハ英邁の僧侶などを渡され直ニ

蘭字事始
彼國人は從ひ學ハせ歸朝の後貴賤上下へ教導の
為めよな給ひ事なれハ漸く盛んなりハ尤
の事なり此蘭學ハ左様の事も非ず然るヨク
成り行ハいハ思ふハ夫醫家の事ハ其教へ
方摠て實ハ就くを以て先とする事也へ却て領會
すること速クなるハ又ハ事の新奇ヨクて異方妙
術も有ることの様ハ世人も覺居る故奸猾の徒こ
れを名として名を釣り利を射る為ハ流布するも
のなるウツらく古今の形勢を考ふるハ天正慶長の
頃西洋の人漸ク我西鄙ハ船を渡セハ陽ハ交

易陰ハ欲する所有てなるヘ故ハ其災起リ
を國初以來甚と嚴禁ナ給ヘリと見ヘタリこれ
世ハ知る起なり其邪教の事ハ知らざる所の他事
なれハ論ナ但ハ其頃の船ハ來來リ醫者の傳
來を受とる外科の流法ハ世ハ残るも有りこれ世
ハ南蠻流ト云ふなり其前後より阿蘭陀船ハ御
免有て肥前平戸へ船を寄せぬ異船御禁止ヨなり
頃も此國ハ其黨類ハ非ハ次第ありて引續き
渡來を許され給ヘリ夫より三十三ケ年目ヨて長
崎出島の南蠻人を逐ひ拂されて其跡へ居を移セ

いふに夫より八年、長崎の津に船を来す事とハ
成りぬ。これハ寛永十八年の事なるに、其後其船
は随従し來る醫師も亦彼の外治の療法を傳へ
者も多し。是を阿蘭陀流外科とハ稱する者
り。是れ固より横文字の書籍を讀て習ひ覺し事
も非ず。只其手術を見習ひ其薬法を聞書留する迄
あり。尤もこなとよなき所の薬品多けれハ代薬
ちよてそ病者を取扱ひし事と知らる。

一其頃西流と云ふ外科の一家出來たり。此家ハ其初
南蛮船の通詞西吉兵衛と云る者よて彼國の醫術

を傳へ人よ施せし其船の入津禁止せられて後
又阿蘭陀通詞となり其國の醫術も傳り。此南蛮阿
蘭陀兩流を相兼しとて其兩流と唱へしを世ハ
西流と呼し。其頃ハ至て珍しき事よて有けれ
ハ專ら行われ其名も高かりし也。後ハ官
醫よ召し出され改名して玄甫先生と申せし。其
其男宗春と申されしハ多病よて早世し給ひ家絶
へし。是れ我祖甫仙翁の師家なり。其後召出
されし今の玄哲君の祖父玄哲先生ハ玄甫先生の
姪の續なり。是なり。右の玄甫先生初て西洋醫流を

唱へられしより 公儀も御用ひ遊されし事
 て阿蘭陀醫事御用子立し始なり
 一又粟崎流といへるハ南蠻人の種子なりと云れハ
 南蠻邪宗の徒嚴禁となり其船の渡海も御禁制と
 なりとれども以前ハ平戸長崎の地は彼人々雜居
 し妻を持ち子も有りしが後々去れども吟味有て
 蠻人の種子の分ハ残らず此地を放流せられしが
 其中粟崎氏よて名ハ「下」云と云ふものハ彼地は成
 長くても其宗よハ入らず其國の醫事を學ひしが
 邪宗よ入らざる訳を以て歸朝を許され召歸され

長崎へ帰りし後其術を以て大に行れ至て上手な
 りし人々粟崎流と稱せしは「下」云と云ふ
 ハ蠻語露の事なるよし後ハ文字を填めて道有と
 認しとそ今の官醫粟崎君の祖なるや又別家の粟
 崎なるは詳なる事ハ知らざるなり吉田流楠林流
 名と云ふハ阿蘭陀通詞よて彼方法を學ひ一門戸
 を開きしなり
 一桂川家の事ハ今の代より五世の祖甫筑先生と申
 しハ 文廟未と藩邸よおとせし時召出されし御
 外科なり其師家ハ平戸侯の醫師よて嵐山甫安と

申とるよゝなり此甫安ハ其族より出島在館の阿
 蘭外科の御託に置いて親しく學ハせ給ひに
 り此御家ハ平戸へ入津以來彼國の事ハ訣品有て
 御親に御自由なる事のよゝ又其時代ハ今の如
 くよもなかりよゝや甫筑君其頃幼若よて門人
 なり師に附添て出島へ時々参られよゝ専ら嵐山
 の流法を傳へ給ひにとなり阿蘭陀の外科ハ「
 子」に「アルマン」にいふ人にきけり桂川も「
 大和の國の人よて森島氏なりよゝ嵐山の流を汲
 むといふ意よて家苗を桂川に改め給ふにたり今

の桂川君の御祖父甫三に申せよゝハ翁若かりよゝ時
 常よ交厚かりよゝ御人なりよゝ故此事語り給へるを
 聞置き侍りぬこれを世よ桂川流と稱よぬる事な
 り

又古来カスバル流といふ外科有りこれハ寛
 永二十年南部山田浦へ漂流ありよゝ阿蘭船の
 人数の内江戸へ招呼れよる中カスバル某と
 いふ外科あり三四年留置れ其療法を學せら
 れよ者もありよゝ追よ長崎へ御送りのよゝ
 江戸並よ長崎よゝも正保の頃此カスバルよ

り傳來の療方ありしを詳なる事を知すとも
 後「カスバル」流と唱ふる事と申す事とや又
 別「カスバル」姓の外科渡來の事もありし
 此他長崎にて吉雄流と云へるハ其後渡來
 の蘭人より傳へ得たる療方も有て吉雄流と
 も申せり其諸家の傳書といふ者共を見るに
 皆膏藥油藥の法のこよて委しき事なり斯の
 如き類にて備らざる事のこなれとも其業ハ
 漢土の外科ハ大ニ勝り又本邦の古へより
 傳りたる外治ハ大ニ勝れりといふべき歟

其中ニ翁々見たる榎林家の金瘡の書と云ふ
 ものあり其中ニ人身中ニ「セイメン」といへる
 ものありこれハ生命ニあつたる大切のもの
 なりと記せり今を以て見れハ是れ「セイニ」
 ふして神經と義譯せしものと思はる必つク
 るらこれ程の事を聞書せしハ此書を始と
 すべし

一國初より前後西洋の事小付てハ志々ぐの事有て
 總て嚴しく御制禁仰出されし事由へ渡海御免の
 阿蘭陀亦ても其通用の横行の文字讀み書の事ハ

御禁止なるふより通詞の筆も只々と假名の書留
 等までふて口づから記憶して通辨の御用も辨せ
 して年月を經とり左ありし事なれハ誰一人横
 行の文字讀習ひ度といふ人もなかりしなりき然
 るハ萬事其時至れハ自ら開け整ふものなる也ハ
 小也

有徳廟の御時長崎の阿蘭通詞西善三郎吉雄幸左
 衛門今一人何某名ハ忘れとらいふ人と申合て談せ
 してハ是まで通詞の家ふて一切の御用向取扱は彼
 文字といふものを知らず只暗記の詞のミを以て

通辨し入組する数多の御用を渴く小辨して勤居
 ることハあまり小手薄き様なり何卒我々斗りも
 横文字を習ひ彼國書をもしむへき事御免許を蒙
 りなさいと小左あらバ以來ハ萬事小付け事情明
 白小分り御用辨するはるへきなり是迄の姿不
 てハ彼國人と偽り欺るゝ事ありても此札を糾明
 するの便りあるき事なりと三人いひ合て此次第
 を申立何卒御免許を下され度旨公へ願ひ奉り
 して御聞届れ至極尤の願筋なりとて速く御免を
 蒙りしとなりこれを阿蘭陀渡来ありて後百年餘

小して横文字學ふ事の始るるよりなり
 一 去れふよりて文字を習ひ覺る事出来西善三郎等
 先つ「コンストウールド」といふ辞の書を和蘭人より
 借り得しを三通りして寫せしし和蘭人去れ
 を見て其精力小感し其書を直し西氏小興へしし
 し斯ありし事等自然達 上聞ける事見へ和蘭書
 と申もの是して御覽遊されし事なき者なり何なる
 りとも一本差し出候様 上意ありしより何
 の書なりしよや図入の本指出せしし御覽遊され
 去れハ図さるりも至て精密のものなり此内の所

説を讀得るるらハ亦必ず委しき要用の事あるべ
 し江戸しても誰そ學ひ覺へるハ然るへしこの事
 不て初て御醫師野呂玄丈老御儒者青木文藏殿と
 の兩人へ蒙 仰候よりなり去れより此兩人去の
 學を心よりけられし然れども毎春一度つゝ拜礼
 不來る阿蘭陀人不付添ひ來る道詞ともより僅の
 滞留中聞給ふ事殊に繁雜す暇もなき間の事なれ
 ハしきく學ひ給ふへき様もなし数年を重ね給ひ
 し事なれども漸く「アン」日「アイン」月「ステルレ」星へ
 しメル 天「アールド」地「アン」人「アライカ」龍「ア」井「ダ」

ル虎ノロイムボーム梅ハムブース竹と云ふ位の名より彼二十五字を書習ひ給へる事のミなり然れども是を江戸小て阿蘭陀事學ひ初め一濫觴なりき

一叔翁ヲ友豊前中津侯の医官前野良澤といへるものあり此人幼小して孤となり其伯父淀侯の醫師官田全澤といふ人小養れて成り立ち一男なり此全澤博學の人なり一々天性奇人として萬事其好む取常人と異なるり一ふより其良澤を教育せし取も又非常るり一とるなり其教不人といふ者ハ世一廢

れんと思ふ藝能ハ學置て未とすても絶へざる様ふく當時人のすてとてとせぬ事とるり一をハ去れを為して世の爲は後小其事の残る様とすへ一と教へられ一々如何様其教不違ハす此良澤といへる男も天然の奇士とてあり一なり専ら医業を勵と東洞の流信して其業を勤め遊藝とても世とすとり一ひとよきん一節截を替古して其秘曲を極め又をり一きハ猿若狂言の會ありと聞て去れも替古と通ひ一事もありとり如此奇を好む性なり一とるり青木君の門と入て和蘭の横文字と其一二の國

語をも習ひたり後著せる蘭訳筌といふもの
 ミ元一藩の坂江鳴といふ隠士一日蘭書の残
 荷を良澤へ見せ去れハ読まけ解すへきも言殊
 ミいひくは借り受てつく思ふ國異言殊
 なるいへども同く人のなす呼ふてなすへ
 ららざる所のものありんや志きせよ扱去
 れよ取付へきの便なきを憾居たりこなる
 夫より不図青木先生此学は通く給ふこ聞き遂
 其門に入りておれを学ひ和蘭文字略考採といふ
 著書を授かり先生の学ひ識是ハ其頃青木先生長
 れる西をバ蘭書せりなるり識是ハ其頃青木先生長
 崎より帰府の後の事と聞か先生長崎へ行かれ
 ハ延享の頃よや思ハる良澤の入門ハ宝暦の末
 明和の初年歳四十餘の時なりく去れ医師にて
 常人の學へる始なるべく

一然れども其頃ハ常人の湯りよ横文字を取扱ふ事
 ハ遠慮せし事なりすては其頃本草家と呼ばれ後
 藤梨春といへる男和蘭事の見聞せしを書集め紅
 毛誌といふ假名書の小冊を著し開板せし其内
 には彼二十五文字を彫り入しを何方より咎を受
 け絶板となりとる去ともありしとそ
 一又其のち山形侯の醫師安富寄碩といふ者糊町に
 住たり此男長崎に遊學し彼地にて二十五文字を
 習ひ且つ其文字よていふは四十七文字を綴り合
 せて認め貫ひ歸り人よ誇りて彼書籍も讀分つや

うふいひ觸らせしを翁杯も珍しき事と思ひたり
 同藩中川淳菴杯ハ鞠町ニ町宅にてありし此男
 より阿蘭陀文字を初て習ひたり
 一翁兼て良澤ハ和蘭の事志ありや否ハ知らず久
 しき事にて年月ハ忘れとり明和の初年の事なり
 しく或る年の春恒例の如く拜礼して蘭人江戸
 へ來りし時良澤翁々宅へ訪ひ來れり去れより何
 方へ行給ふと問ひし今日ハ蘭人の客屋に參り
 道詞に逢ふて和蘭の事を聞き模様より蘭語杯
 も問ひ尋ねんうとめなりといへり翁其頃いよと

年若く客氣甚しく何事もうつり易き頃なれハ願
 くハ我も同道に給れ共ニ尋試しとて申けれハ
 いと易き事なりとて同道にて彼客屋に行きより
 其年大道詞ハ西善三郎に申す者参りたり良澤引
 合よてしうくのよく申述するは善三郎聞てそれ
 ハ必ず御無用なり夫ハ何故と存れハ彼辞を習ひ
 て理會するといふハ難き事なりとてハ湯水又
 酒を呑といふは問んとするは最初ハ手真似
 て問ふより外の仕うとハなし酒をのむといふ事
 を問んとするは先つ茶碗にても持添へ注ぐ真似

をくして口よつけて是ハと問へハうなづきて「デリ
ンキ」ニ教由是れ即ちのむ事なり扱上戸ニ下戸ニ
を問ふハ手真似ふて問ふべき仕々ハ存レコ
レハ数々吞むニ少々吞めて差別ヨリ存りきれ
とも多く吞ても酒を好よさる人あり又少々のミ
ても好人あり是ハ情の上の事なレハ存すべき様
なり扱其好き嗜むといふ事ハ「アインテレゲン」ニ
いふ存り我身道詞の家ニ生れ如より其事ニ馴若
存らら其辞の意何の訳といふ事を知らず年五十
よ及んく此度の道中ヨク其意を始て解得たり「ア

「イン」ニハ元向ふといふ「テレゲン」ニハ引事なり其
向ひ引といふハ向ふのものを手前へ引寄るなり
酒好む上戸といふも向ふの物を手前へ引度思ふ
存り即ち好むの意存り又故郷を思ふも斯くいふ
是又故郷を手元へ引よせ度と思ふ意あれハ存り
彼言語をさらし習ひ得んとするヨハ箇様ニ面倒
なるものこく我輩常ニ阿蘭陀人ニ朝夕してす
ら容易ニ調得難く中ニ江戸存り小居れて學ん
と思ひ給ふハ不叶事なり夫故野呂青木両君存り
御用小て年々此客館へ相越され一々存らす御

蘭学事始

天保本

出精なれどもさうくく御合点忝らぬなり其元
 小も御用の方然るべし異見くとり良澤ハ如
 何兼りハ翁ハ性急の生れ也へ其説を尤も聞き
 その如く面倒なる事をなく遂る氣根ハなく徒
 日月を費すハ無益なる事と思ひ敢て學ぶ心ハな
 くして歸りぬ

一其頃より世人何もなく彼國持渡りのものを奇珍
 として総て其舶來の珍器の類を好み少くく好事
 きこえく人ハ多くも少くも取聚て常々愛せざる
 なる殊に故の相良辰當路執政の頃よく世の中

甚ど華美繁花の最中なりよくより彼船よりウエ

ールガラス「天氣」「驗器」
 ラス「震雷」「驗器」
 ムル「暗室」「寫」
 ス「鏡」「真鏡」
 年々持越其餘諸種の時計千里鏡ならひは硝子細
 工物の類あげて数へりさるりよくより人々其奇
 巧よ甚と心を動し其窮理の微妙なるに感服し自
 然と毎春拜礼の蘭人在府中ハ其客屋に夥く聚る
 やうとなりとり何れの年といふとハ忘れり

明和四五年の間なるへー一とせ甲必丹ハヤシカ
 ランス外科ハバブルといふもの來りし事あり此
 カランスハ博學の人バブルハ外科巧者のよしを
 り大道詞吉雄幸左衛門ハ専ら此バブルを師とし
 たりと幸左衛門後幸作舞ハ耕牛と云りハ外科巧者なりとて
 其名高く西國中國筋の人長崎へ下り其門に入る
 者至て多し此年も蘭人ハ附添來れり翁夫等の事
 を傳へ聞し由へ直し幸左衛門ハ門に入り其術を
 學へり去れよよりて日く彼客屋へ道ひとり一日
 右のバブル川原元伯といへる醫生の舌疔を診ひ

て療治し且刺絡の術を施せしを見とり扱く手
 入りとふものなりき血の飛び出す程を預め考へ
 去れを受るの器を余程引たる置とるは飛透
 の血てうど其内に入りたりき是れ江戸にて刺絡
 せし始なり其頃翁年若く元氣ハ強し滞留中ハ
 怠慢なく客館へ往來せし幸左衛門一珍書を出
 し示せりこれハ去年柄て持渡りしバーステル人
 の「ジュゼイン」外科治術といふ書をりし我深く懇望し
 て境樽貳拾挺を以て交易しとりと語れり去れを
 披き見るは其書説ハ一字一行も読む事能ハざれ

とも其諸図を見るよ和漢の書にハ其趣大ニ異ニ
 して図の精妙なるを見てハ心地開クヘキ趣もあ
 りよりて暫ク其書をり受けせめて図をりりも
 換ヘ置ヘキと晝夜写しりり彼在留中ニ其業を
 卒ヘとりこれよりて或ハ夜を去めて鶏鳴ニ及
 ひとり事もありき

一又年ハ忘れとり一春々の幸左衛門阿蘭陀附添ニ
 て参府セリ頃豊前中津邸ニて昌慶公の御母君御
 座内ニて不慮ニ御脛を折傷ヘ給ヒ事あり貴人
 の事をレハ大騒キニて彼是醫師を御招キの起幸

ひニ吉雄幸左衛門出府居合候事ニヘ直ニ御招キ
 ありて御療治被仰付御順快ありたり此時前野良
 澤御手醫師の事ニヘ懸合仰付られ格別懇意とな
 りたり去れ等蘭学の世小開クヘキ一ツといふヘ
 其後其主の供ニて中津ヘ行リケル候ヘ頼ハ奉リ
 て彼地ヘ下リ専ラ吉雄播林等ニ従ヒて百日斗リ
 も逗留ヘ晝夜精一ニ蘭語を習ヒ先ニ青木先生ニ
 リ學ヒリ類語ニ題セる書の諸言を本ニして復習
 訂正ヘ存不去れニ足ヘ補ヒて僅ニ七百餘言を習
 ひ得彼國の字躰文章等の事等も荒増ヘ閱書ヘて

持帰り一書ありとり此時ハハ蘭書も求めて帰
 府せり是れ長崎へ外治警古の為めならで彼書説
 學とんきて参り又の始めなり
 一和蘭ハ醫術並ひは諸々の技藝も精一き事と世
 にも漸く知り人氣何もなく化せられ來れり此頃
 よりも専ら官醫の志ある方々八年ハ對話といふ
 事を願て彼客屋へゆき療術方藥の事を問ひ給ひ又
 天文家の人も同く其家業の事を問ひ給へり當
 時ハ其人々の門人なれハ同道ハ給へる事も自由
 なり左あるより其方々の門人ハ唱へ出入りもあ

りとり長崎ハ御常法ありて猥り又旅館への出入
 ハならぬ事なる又江戸ハ暫くの間的事なれハ自
 然と構もなき姿なりき其頃平賀源内といふ浪人
 者あり此男業ハ本草家にて生得て理よきとく敏
 才小くしてよく時の人氣よくなり生れなりき何
 れの年なりと右といふカランスといへる加比
 丹恭向の時なりと或る日彼客屋に人集り酒宴
 ありと時源内も其坐に列りありとカランス戯
 々一つの袋を出し此口試みに明け給ふへあけ
 とる人々恭らすへといへり其口ハ智慧の輪と

くさるものなり坐客次第は傳へさましく工夫すれども誰も聞き兼とり遂は末坐の源内は至れり源内はれを手に取り暫く考へ居りて乍ち口を開き出せり坐客はいふは及はず「カラン」も其才の敏捷なるは感し直は其袋を源内は典へとりこれよりして甚と親しみ厚くなり其後ハとひく客屋へ至り物産の事を尋問へり又ある日「カラン」一つの棋子の如き形の「スランガステーン」といふ物を出し示せり源内はれを見て其功用を問ひ帰り翌日別は新は一箇の物を作り出して持ち行き「カラ

ン」見せとり「カラン」是を見て去れハ前日見せし物と同品なりといへり源内曰く示さるる所の品ハ貴國の産物又ハ外國にて求め給へるものなりと問ふと去れハ印度の地才別意蘭と云ふ所にて求め來れりと答ふ源内又問て曰く其國にてハ如何なる所は産するものといへハ「カラン」曰く其國にて傳る所ハ此物大蛇頭中より出る石なりといへり源内閉てそれハ左様ハあるは是ハ龍骨にて作りし物なりといふ云ふ「カラン」は閉ていふ天地の間は龍といふものハなき物なり

り如何して其骨にて作るへいといへり是は於て
 源内巴々故郷なる讃州小豆島より出せる大なる
 龍齒一ツと云ふ龍骨を出し示して是即ち龍骨
 なり本草綱目といへる漢土の書に蛇ハ皮を換へ
 龍ハ骨を換ふと説けり今我亦す所のスランガス
 テトシハ此龍骨にて作れる物なりといへり「カラ
 ンス」聞て大ひに驚き益其奇才に感しより去れし
 よりて本草綱目を求め右の龍骨を源内より貰ひ
 得て歸れり其返礼として「コンストンス」禽獸譜「
 トニユース」生植本草「アンボイス」貝譜をいへる物

産家一益ある書物共を贈りたり是等の事も直對
 接話にて辨しとる事ハあらす附き添とる内通
 詞部屋附などいへる者にて其情を通して辨せし
 去と小て一字一言通知せし去と小ハあらす其後
 源内彼地へ遊歴し蘭書蘭器なども求め來り且つ
 「エレキテル」といへる奇器を手小入れ歸府し其機
 用の事をも漸く工夫して遍く人を驚せり
 一此風右の如く成り行けとも西洋の事と通しとる
 といふ人もなかりし只何となく此事遠慮する
 去ともなきやう小なりとる蘭書杯所持する去と

御免といふ事ハなけれども間々所持する人もあ
る風俗に移り來れり同藩の醫中川淳庵ハ本草を
厚く好之和蘭物産の學亦も志ありて田村藍水同
西湖先生杯とも同志して毎春赤向せる阿蘭陀通
詞共の方亦も往來せり明和八年々のこの卯の春
ろと覺へたり彼客屋へ至りて「グーヘルアトミ
ア」ミカスパリユスアナトミ「ア」ミいふ身躰内景圖説
の書二本を取り出し來り望人あらハ由つるへ
いふ者ありて持帰り翁に見せたりもさふり
一字もいむ事ハならされども臟腑骨節去れして

見聞する所ハ大ニ異なりて去れ必ず実験して
圖説よるものニ知り何となく甚と懇望と思へ
り且つ吾家も從來阿蘭陀流の外科ニ唱ふる身を
れハせめし書篋の中にもそなへ置さきものと思
へり然れども其頃ハ家甚と窶としくして去れを
求るニ力及ひつゝりより我藩の大夫岡新
左衛門といへる人のもさまた持行きつゝの次第
なれハ此蘭書求め度と告より然れども力の足ら
ざるハ是非なく語りつゝハ新左衛門聞きそれ
ハ求め置て用立つものゝ用立つものならハ價ハ

上より下し置るへき様取計ふへしといへり其
 時翁それハ必ずふさいふ日當連ハなけれど
 是非とも立つものにして御目よ掛くへし
 答へり傍に小倉小左衛門後青野と改むといふ男居たり
 一ガそれハ何卒調へ遣さるへし杉田氏ハ去れを
 空くする人ハあらす助言しとり依之いし心
 易く願も望の如く調ひ得たり是れ翁の蘭書手よ
 入りし始めなり
 一扱毎に平賀源内をこよ出會し時又語り合しハ逐
 々見聞する所和蘭実測究理の事共ハ驚入りし事

わたりなり若し直に彼國書を和解し見るならハ
 格別の利益を得る事ハ必せりされども是また其
 所は志を發する人のなきハ口惜き事なり何とそ
 此道を開くの道ハあるまじきや連も江戸杯まで
 ハ及ぬ事なり長崎の通詞は託して讀み分けさせ
 度事なり一書よても其業成らハ大なる國益にも
 成るへし只其及ひがときを嘆息せしハ毎度の
 事なりき然れども空しく去れを慨嘆するのよにて
 ありぬ
 一然るに此節不思議に彼國解剖の書手入りし事

されハ先其圖を实物ニ照シ見ときと思ひハ又実
小此亭開クへきの時至りける又や此春其書の手
又入りハ不思議とも妙とも云んハ抑頃ハ三月
三日の夜ニ覺へたり時の町奉行曲淵甲斐守殿の
家士得能万兵衛といふ男より手紙もて知らせ越
せハ明日手醫師何某といへる者千住骨ヶ原ニ
て臍かいとせりふハ御望あらハ彼方へ罷り
越れふハ言文を去り兼て同僚小杉玄適
といふもの其以前京師の山脇東洋先生の門ニ遊
び彼地ニ在リ時先生の企ニて觀臟の事ありハ

此男ニ從ひ行て親シく視ると古人諸説皆空言
ふて信ハくとき事のミなり上古ハ九臟ニ稱せり
今五臟六腑の目を令らるとハ後人の杜撰なり
んといへる事の話もあり其時東洋先生臟志と
いふ著書をも出給ひたり翁其書をも見ハ上の事
なれハよき折あらハ翁も自ら觀臟してよと思ひ
居たりハ此時和蘭解剖の書も初て手ニ入リ事な
れハ照シ視て何れハ其实否を試むハ喜ひ一
ろとならぬ幸の時至れりハ彼地へ罷る心ニて殊
ニ飛揚せり扱斯る幸を得ハ事を獨り見るべき事

ともあらず朋友の内にも家業も厚き同志の人々
 へハ知らせ遣ハ一同く視て業事の益もハ相互
 なるべきものと思ひ量りて先同僚中川淳菴を
 初某誰と知らせ遣ハせし中も良澤へも知らせ
 越しより叔良澤ハ翁よりも齡十をりも長し我
 よりハ老輩の事にてありし故相識も去るあれ常
 くハ往來も稀に交接するなりしと醫事志篤
 きハ互ひふ知り合する中なれハ此一擧も漏すへ
 き人ともあらず先早く申通しとく思ひとれとも
 さし拭りし事且つ此夜も蘭人滞留の折なれハ彼

客屋もありける也へ夜分もハなりぬ俄に知らず
 へき便りも存し如何せんぞ存せしと臨時の思付
 小て先手紙調へ知れる人の許し立寄り相謀りて
 本石町の木戸際も居たりし過駕の者をやとひ申
 遣せしハ明朝も々の事あり望あらハ早天も浅
 草三谷町出口の茶屋まで御越しあるへし翁も此
 処まで罷越し待合すへしと認め置捨て帰れと
 持せ遣しけり

一其翌朝とく支度整ひ彼所も至りしと良澤恭り合
 其余の朋友も皆々恭會し出迎たり時と良澤一つ

の蘭書を懐中より出く披き示して曰く去れハ是
 「ターヘル・アナトミア」といふ和蘭解剖の書なり先
 年長崎へ行きとりし時求め得て帰り家藏せしも
 のなりといふ去れを見れハ即ち翁の此項手入
 りし蘭書と同書同版なり是れ誠ニ奇遇なりとて
 互ひし手をうちて感せり叔良澤長崎遊學の中彼
 地にて習得聞置しとて其書をひらき去れハ「ロ
 グ」として肺なり去れハ「バルト」として心なり「ターグ」と
 いふハ胃なり「ミル」といふハ脾なりと指し教へ
 たり然れども漢説の図は似るへいもあらざれ

バ誰も直し見ざる内ハ心中よりいふはやと思ひし
 去りてありき
 一 去れより各打連立て骨ヶ原の設け置し觀臟の場
 へ至れり叔腑分の事ハ穢多の虎松といへるもの
 此事は功者のよしとて兼て約し置しよし此日も
 其者より刀を下さすへしと定めざるよその日其者
 俄に病氣のよしとて其祖父なりといふ老屠齡九
 十歳なりと云る者代りしとて出たり健なる老者
 なりき彼奴ハ若きより腑分けハ度々手よりけ数
 人を解たりと語りぬ其日より前迄の腑分といへ

るハ穢多し任せ彼ら某所をさして肺をりて教へ
 去れハ腎をりて切り分け示せり夫を行き視て又
 之看通して帰り我ハ直ニ内景を見究めたるに
 いひくまての事よてありしとなり固より臟腑は
 其名の書記してあるものならねハ屠者の指し示
 すを視て落着せし去りて其頃まてのならひを
 るよくなり其日も彼老屠者彼れの此れのみ指し
 示し心肝膽胃の外は其名なきものをさして名ハ
 知らねども已れ若きより数人を手よりけ解き分
 けし何れの腹内を見ても此処よりやうの物あ

りうくこは此物ありと示し見せたり圖よりて
 考れハ後ハ分明を得し動血脈の二幹又小腎をど
 よてありたり老屠又曰只今まて腑分の度其腎
 師々と品々をさし示しこれとも誰一人某ハ何
 此ハ何くなり疑れハ御方もなりしといへり
 良澤相俱し携ひ行し和蘭圖は照し合せ見し一
 こくといさく違ふ事をき品々なり古來醫經は
 説する所の肺の六葉兩耳肝の左三葉右四葉など
 いへる今ちもなく腸胃の位置形状も大は古説と
 異なる官醫岡田養仙老藤本立泉老などハ其大なる

さて七八度も腑分給ひ由なれども皆千古の説と違ひ一毎度疑惑して不審開けず其度々異状と見しものを写し置れつらく思へハ華夷人物違ありやなと著述せられし書を見ざる事もありしハ去れり為なるへし扱其日の解剖事終りとももの事骨骸の形をも見るへし刑場は野さらしなり骨共を拾ひとりてかず見しは舊説とハ相違しして只和蘭圖は差へる所なきは皆驚嘆せるの事なり

其日の刑屍ハ五十歳をうりの老婦にて大罪

を犯せし者のよし元京都生れてあど名を青茶婆と呼れしものと

一 帰路ハ良澤淳庵と翁と三人同行なり途中にて語り合しハ扱今日の実験一驚入且去れし心付ざるハ耻べき事なり苟も賢の業を以て互に至君々へ仕る身にして其術の基本とすへき吾人の形骸の真形をも知らず令迄一日々此業を勤め来りしハ面目もなき次第なり何ぞ此実験は本つき大元も身骸の真理を辨へて賢をなさし此業を以て天地間し身を立るの申訳もあるべ

一と共くは嘆息せり良澤もげは九千萬同情の事
 有り感一ぬ其時翁申せしハ何とぞ此「タ」フル
 アナトミアの一部分新と翻譯セハ身軀内外の事
 分明を得今日療治の上の大益あるへいりも
 して通詞等の手をうらす讀み分けさきもの有り
 と語りしは良澤曰く予ハ年来蘭書よみ出度
 宿願あれど去れし志を同するの良友存し常々
 去れを慨き思ふのこよて日を送れり答うと弥去
 れを欲し給ハ我前の年長崎へも亦き蘭語も必
 とハ記臆し居れりそれを種として共くよみ撰る

へーやといひけるを聞それハ先づ喜ハしき去
 たり同志の力を戮せ給らハ憤然として志を立て
 一精出し見申さんと答へたり良澤去れを聞き悦
 喜斜ららす然らハ善ハいそげといへる俗説もあ
 り直は明日私宅へ會し給へり如何やうとも工
 夫あるへいと深く契約して其日ハ各々宿所々々
 へ別れ帰りたり
 一其翌日良澤の宅に集り前日の去とを語り合ひ先
 つ彼「タ」フルアナトミアの書よりち向ひし誠
 二艦舵なき船の大海に衆出せし如く茫洋と

て寄へきなく只あきれあきれて居る迄なり
 されども良澤ハ兼てより此事を心は掛け長崎迄
 もゆき蘭語並ひに章句語脈の間の事も少くハ聞
 覚へ聞ならひ一人といひ齡も翁をとりハ十年
 の長より老輩なれハ去れを盟主と定め先生と
 も仰く事となりぬ翁ハいまと二十五字さへ習ハ
 才不意と思ひ立し事なれハ漸くは文字を覚へ彼
 諸言をもならひいふとあり
 一扱此書をよと始るに如何様にして筆を立へて
 談し合しは迎も始より内象の事ハ知れかゝる

べし此書の最初は仰伏全象の図あり去れハ表部
 外象の事なり其名起ハ皆知れとる事なれハ其図
 と説の符號を合せ考ふる去とハ取付きやするへ
 し圖の初とハいひととく先つ去れより筆を取り
 初むへしと定めたり即解體新書形骸名目篇去れ
 たり其去るハ「テ」の「ハ」の又「アルスウェル」等の助
 語の類も何れも何やら心は落付て辨へぬ事ゆへ
 少しつゝハ記臆せし語ありても前後一向に
 らぬ事さうりなり譬へハ眉をいふものハ目の上
 に生しとる毛なりと有るやうなる一句紛紜と

て長き日の春の一日は明らめられず日暮る迄
 考へ詰む互はふらミ合て僅一二寸の文章一行も
 解く得る事ならぬ去るまで有りたり又或る日
 鼻の吹きて「ブルヘッヘンド」せしものなりとあるは
 至りしは此語よりらす是は如何なる事である
 へきと考合しといふふもせんやうなく其頃「ウオ
 ルデンブック」釋辭といふものもなきようやう長崎
 より良澤永め帰りに簡略なる一小冊ありしを見
 合するは「ブルヘッヘンド」の釋註は木の枝を断ち
 る迹其迹「ブルヘッヘンド」をなく又庭を掃除すれ

其塵土聚り「ブルヘッヘンド」すといふ様より出せ
 り去れは如何なる意味なるへし又例の去る
 去つつけ考ひ合ふは辨へ兼とり時は翁思ふは木
 の枝を断りし跡愈れは堆くなり又掃除して塵
 土あつまれは去れもろづとなくなるなり鼻の面
 中は在りて堆起せるものなれは「ブルヘッヘンド」
 ハ堆といふ去るなるべし然れは此語ハ堆と譯し
 ては如何といひけれは各去れを関て甚と尤なり
 堆と譯さハ正當すへしと決定せり其時のうれし
 さハ何よととへんうとなく連城の玉をも得し

心地せり如此事にて推て訳語を定めり其数も次第
 増く事となり良澤のすては覺居
 譯語書苗をも増補しけるなり其中にも「精神」
 なといへる事出づ至てハ一向に思慮の及ひ
 としき事も多うりし去れらハ亦往々ハ可解時も出
 來ぬへし先つ符號を付置へしにて丸の内は十文
 字を引ききて記し置たり其頃不知たをハ雲十文
 字と名けたり毎會いろくは申合せ考へ案くても
 解すへうらさる事あれハ其苦さの餘りそれも又
 くつ二十文字くし申たりき然れども為すへき事

ハ固より入る在り成るへきハ天にありの喩の如
 くなるへし如此思ひを旁に精を研り辛苦せし
 去り一ヶ月は六七會なり其定日ハ怠りなくしけ
 るなくして各相集り會議して讀合ひしは實に不
 昧者ハ心さゆらして凡一年餘過ぬれハ譯語も漸
 く増し讀み随ひ自然に彼國の事態も了解する様
 として後々ハ其章句の疎あまきハ一日は十行も其餘
 も格別の苦勞なく解し得るやうにもなりしなり尤
 毎春赤向の通詞ともへも閑亂せし事もあり又其
 間ハ解屍の事もあり亦獸畜を解きて見合せし

事も度々の大なるき

蘭學事始上卷終

蘭學事始下之卷

一此會業怠らすくて勤とりに中次第も同奥の人も
 相かり寄りつとふ事なりと各志す所ありて一
 様ならず翁ハ一とひ彼國解剖の書を得直に実験
 東西千古の差ひある大を知る明らぬ治療の
 实用をも立て世の醫家の業をも發明ある種も
 なくとく一日もたかく此一部を用立つ様もな
 見度と志を起せし事也へ他も望む所もなく一日
 會て解するに其夜翻譯して草稿を立ててこれ

付きてハ其譯述の仕々を種々様々考へ直
セし事四年の間草稿ハ十一度迄認めて板下
渡すやうになり遂に解體新書翻譯の業成就
り抑江戸にて此學を創業して腑分といひ古
まを新に解體と譯名し且社中にて誰いふ
く蘭學といへる新名を首唱し我東方闔州自然
通稱となるも至れり是れ今時の大に隆盛
なるへき最初嚆矢なり今を以て考れハ是迄二
年來彼外科法ハ傳はりなれども直に彼醫書
譯するといふ事ハ絶てなかりし此時の創業

蘭學

〇一

蘭學

可思議にもんを醫道の大經大本たる身體内景の
書其新譯の起始となりしハ不用意を以て得る
ふして實は天意とやいふへ
一 過ぎ去りたるを顧るも未だ新書の卒業に至ら
る漸に斯の如く勉勵するも二三年も過ぎ
し漸に其事跡も辨するやうなるも随ひ次第
蔑を嗽ふ如くして其甘味を喰ひつき去れ
千古の誤も解け其筋とくは辨へ得し事
の樂しく會集の期日ハ前日より夜の明るを待
見女子の祭り見よゆく心地せり扱都下ハ浮華

蘭學

天眞樓藏

の風俗なれハ他の人も大れを関傳へ雷同して社
 中へ入來りしものもありたり其時の人々を思ふ
 一遂るも遂さるも今ハ皆鬼録上の人の多し嶺
 春春鳥山松圓といへる男をこハ頗る出精せし
 今ハ則ち亡く同僚淳庵をこも新書上木の後なり
 けれとも五十は満とすして世を早うせり其去る
 往來せし者よて今ハ生残りしハ翁よりハたる
 歳下の人なれとも私前の醫官桐山正哲までなり
 又其頃此業の普及なるを知れるものハ格別とへ
 て知らさるものハ大に怪しき疑ふもの多かりき

扱集り來りたる者の内にも其業のたつとつから
 すそれと突き尚めもなき面倒なる事あり遂に精
 力盡きて又ハ今日の生計は逐る人ハ其しる
 一見へさるは倦む且ハ已を得ず中道よして廢す
 るといへる族も多かりき又ハ偶志厚かりし者も
 多病よして事ならず早世せしも數多ありたり最
 初より會合ありし桂川甫周君ハ天性穎敏逸群の
 才よてありしを彼文辭章句を領解し給ふ事も
 萬端人より早く未だ弱齡とハ申社中よても未頼
 母教芳しとて賞嘆したりき尤其家代々阿蘭陀流

外科の官醫なる上其父甫三君ハ青木先生より「ア
 へセ」二十五字をえりて僅なるらも蘭語存とも傳
 り給ひくを聞覺へ火くハ其下地もありく故もや
 退屈のやうすもなく會ふとハ念りなく出席く
 とまへり
 一同盟の人々毎會右の如く寄つとありく事かくあり
 くといへども各其志す所異なり是れ實は人の通
 情なり先づ第一の盟主とする所の良澤ハ奇異の
 戈のへ此學を以て終身の業となく盡く彼言語の
 通達く其力を以て西洋の事跡を知り彼書籍何よ

ても讀得よきの大望也へ其目的とするハ康熙字
 典をこの如き「ワールデンブック」を解了せんといふ
 事深く意を用ひたりそれゆへ世間浮華の人よ
 多く交る事を厭ひたり此學開へき天助の一ツハ
 唱へ人々も交らハ常一閉戸て外へも出ず亦湧り
 居れり其君昌康公ハ其素心の情合をよく知れり
 彼ハ元來異人なりて深く分も給ふす然れども
 へも告奉りく怠りガありたりけハ勤方疎漫なり上
 つつめ後生も勤めあり又其業のめをなすも終業を
 天下後世の民の利益なり其事を為さんとすも取り
 も直さ其業を勤むるなり彼ハ欲する所あり見
 由れハ其業の勤むるなり彼ハ欲する所あり見
 捨さく置れり内科書を求められ其紙端一御印
 テ「キ」杯いへる内科書を求められ其紙端一御印

章押ひ給ひて典へ給ひ事もあり元未其跡を樂
 山と呼ひ給ひて高年の後自ら蘭化と稱せり大良
 昔ハ君侯より賜り物なりと御戯れハ君侯常ニ良
 沢ハ阿蘭陀人の化物なりと御戯れハ君侯常ニ良
 り出たり其寵遇かく其學の修行未とありたり
 故良沢心の雷同く其學の修行未とありたり
 扱浮華なる一日の如く其業を遂けハ勤クあり
 の近遠なる一日の如く其業を遂けハ勤クあり
 先生生涯ハ今日の如く其業を遂けハ勤クあり
 へ其中ハ今日の如く其業を遂けハ勤クあり
 思ハるる時又遭ひ全ク此の事又中川淳庵ハ兼て
 開くるとの時は遭ひ全ク此の事又中川淳庵ハ兼て
 物産の學を好める故何ぞ此業を勤め海外物産
 をも知り明らかめとき事を欲せり亦傍ら奇器巧技
 工夫を凝して新製せるも少く初年隔症を患て
 千古の桂川君ハさして天明日の初年隔症を患て
 なる人桂川君ハさして天明日の初年隔症を患て

見へねども前よりいへる家柄なれば只何ぞなく
 此事を去のミ給ひ給ハ若く氣根ハ強く會毎ニ來
 り給ひ此舉ニ加り給へり翁ハ去れらとハ大ニ
 違ひ始て觀職ハ和蘭國ニ徴して千古の差あるニ
 驚きいろも先此一事を早くあきらめ治療の用
 を助けさく又世醫法術發明の間ニも用立つやう
 なるとき志のミなりけれハ何とそ一日も早く
 速ニ此一部見るへきものニ存しなん心掛け此
 一書の訣を其事成らハ望足りぬと心を決し思
 を興せし依て深く彼諸言を覺へ他事を為すの

望ハなうりくあり五色の糸の乱れハ皆羨なるものなれども赤と黄なるは一色ハ決し餘ハ皆きり棄る心にて思ひ立しなり其節思慮するは應神帝の御時百濟の王仁初て漢字を傳へ書籍を持渡りてより代々の天子學生を異朝へ遣はされ彼書を學ハせ給ひ数千歳の今に至りて始めて漢人よりも耻さる漢學出来る程となりたるなり今首めて唱へ出せるの業何として俄に事整ふて成就すへきの道理なり只人身形體の一事千載所説の違ふる所を世に示し何をも其大體を知らせしむ

思ひく述べて他は望む所なく一決し右ともいへる如く一日會して解せし所を其夜宿し歸りて直に翻譯し記しおめ置たるなり同社の人々翁の性急なるを時々笑ひし由へ翁答へけるハ凡そ丈夫ハ草木と共に朽へきものならずとくハ身健り且齡ハ若し翁ハ多病にて歳も長けたり往々此道大成のときハ逆も逢ひうとかるへく人の生死ハ預め定めうとく始て發するものハ人を制し後れて發するものハ人々を制せらるるといへり此故に翁ハ急き申すなり諸君大成の日ハ翁ハ地下の人

となりて草葉の蔭に居て見侍るへく答けれハ
 桂川君などハ大に笑ひ後々ハ翁をアキハ譚名して草葉
 の蔭と呼び給へり斯るまことよて年月ハ過行き白
 駒の隙過るよりも早くとかくせし間ハ三四年の
 月日を重ね逐々世の人も聞傳へて尋来るもあり
 一也へ西洋西説の臟腑経絡骨節等其既ハ知るを
 を以て大凡ハ其真面目を語り示せる不レハな
 りたり

一解體新書未之上木の前なりし頃奥州一関の醫官
 建部清庵由正由といへる人たるるに翁の名を聞傳へ

て平生記し置たる疑問を送りし事あり其書は記
 せし事とも我業に就きてハ感嘆する事多く去れ
 ばて相識れる人ともあらず翁の志を同するも
 千里一契なり其書といふ去れよしの阿蘭陀流外
 科片假名書の傳書を此術の基とするよてなるハ
 扱々残念なり世は有識の人出て昔ハ漢土よし
 佛經を翻譯せし去りてハ阿蘭陀の書をも和鮮な
 一さらハ正真の阿蘭陀醫流成就すへしと記せら
 れたり去れハ其時より二十餘年前よりの懸念と
 き去へたり實に其見解感するも餘ありさうらす

も翁其人よりを抑躍し吾等の知己千載の
 一奇遇なりと答書を報し夫より往復絶すして書
 信を通し其縁よりて品々の事もあり門人等其
 書通を書きあつめ蘭學問答と名け留とり

後子守等藏版となりぬ和蘭醫
 事問答と題せしものハこれなり

一翁ハ元来疎漫にして不學なる也へ可成りは蘭説
 を翻譯しても人のそやく理會し曉解するの益あ
 るやうになすへきカハなく去れども人は託して
 ハ我本意も通はらなくやむとなく拙陋を顧す
 して自ら書綴れり其中は精密の微義もあるへ

と思へる所も解しつゝとき所ハ疎漏なりと知りな
 ららも強て解せず惟意の達しとる所をりを舉
 置けるのとなり譬へハ京へ上らんと思ふは東
 海東山二道ある事を知り西へくへ行けハ終はハ
 京へ上り著くといふ所を第一とすへくは其道筋
 を教るまでなりと思ふ所より其荒増の大方をり
 りを唱へ出せしなり去れを手初ふして世醫の為
 は翻譯の業を首唱せしなり素より浮屠氏翻譯の
 法ハ辨へず殊小和蘭書翻譯といふ事ハ古今小な
 き所の最初なれハ此讀み初の時小あとり細密な

る所ハ固ヨリ辨すへき様もな〜只幾重もも醫と
 るものゝ先第一ハ臟腑内景諸器の本然官能を知
 らす〜てハ濟す何をも各其实を辨へ〜互ニ治療
 の助ふなさとやと思へるハ本意をうりなり此志
 由へ此譯をいそぎて早く其大筋を人の耳にも留
 り解〜易〜な〜て人々是はして心は得〜醫道は比
 較〜速〜曉り得せ〜ゆんとするを第一とせり夫
 故なるとけ漢人称する所の舊名を用ひて譯〜あ
 け〜と〜思ひ〜なれ〜も此は名もものゝ彼は呼ぶ
 ものゝハ相違のもの多けれハ一定〜う〜と〜當惑

せり彼是考へ合すれハ逆も我より古をなすこと
 なれハいつれホ〜ても人々の曉〜易きを目當と
 して定る方と決定〜て或ハ翻譯〜或ハ對譯〜或
 ハ直譯義譯とさま〜工夫〜彼は換へ此は改め
 晝夜自ら打掛り右もいへる如く草稿ハ十一度
 年ハ四年は満ちて漸く其業を遂け〜り尤其頃ハ
 彼國俗の精察微妙の所ハ明了すへき事ハあら
 す今の如く思ひよらす開け〜所より見る人ハさ
 そ誤解のこゝいふへ〜首めて唱る時ハあ〜りて
 ハな〜く〜後の識りを恐る〜やうなる様々〜る

一約圖既に成り本篇も出版にも成りしるも前條
 といへる去とく紅毛談さへ絶版となりし程の事
 なれハ西洋の事ハ假初にも唱ふる事ハならぬ事
 とも併し和蘭ハ其中にも各別なるともや否の所
 不分明にて屹度去れハ苦くらすといふ事も決
 してとく若し私に去れを公にせハ萬一禁令を
 犯せしと罪を蒙るへきも知られず此一事而已甚
 恐怖せし所なり然れとも横文字を其まゝに出せ
 るともあらず且讀て見れハ其姿ハ知る去となり

我醫道發明の爲なれハ敢て苦くらす自ら決
 定し何れにも翻譯といふ事を公にする初を唱ふ
 へしと竊に覺悟を極めて決断せし事なり但是
 ハ其事の最初なれハ何を此一部恐れ多くも眞
 加のよめ 公儀へ獻し奉りしき志願なりし
 幸ひ同社桂川甫周君の御父甫三君ハ前といへる
 如くの舊友なりけれハ此法眼に謀りし其取扱
 推舉より御奥より内獻し奉りぬ斯く障もなく
 事済しハ難有御事なりき又翁より從弟吉村辰碩ハ
 京都に住居せり此又の推舉を以て時の関白九條

家並近衛准后同前公及び廣稿家へも一部づゝ
 奉りぬ大れよりて三家より目出度古歌を自ら
 の詩を賦染筆して賜り又東坊城家よりハ七言絶句
 て賜りぬ尤時の大小御老中方へも同く一部
 つゝ進呈くとり何方とくも何の障れる事もなく
 相済ぬ去れらより大に此舉に於る安堵を
 なくとりきまれ和蘭翻譯書公けになりぬるま
 めなり

一翁初一念ハ此學今時の去と盛なり斯く
 開くへハ曾て思ひよらさりなり是れ我不
 きより先見の識乏き由へなるへ今に於て去

れを顧ふ漢學ハ章を飾れる文也へ其開け遅く
 蘭亭ハ実事を辞書に其ま記せし者也へ取り受
 けさゆく開け早かり又安ハ漢學にて人の智
 見開け後又出たる事也へかく速くなり知り
 るへうらす然れども斯業の自然に開くへきの氣
 運よ此去るより前記せる東奥の建部氏翁に
 ハ二十歳より長たる翁なる不思議に書讀
 の往復ありし我答書を得て実ハ狂喜帝ならず
 と申越せし趣なれども身の老朽を如何せんとして
 其息亮策を我門に入れ續ひて其門人大槻玄澤と

いふ男をさし登せて我門に入れし此男の天性
 を見るに凡そ物を學ぶ事實地を踏されハなす去
 こなく心は徹底せざる事ハ筆舌は上せず一跡豪
 氣ハ薄けれともすへて浮たる事を好す和蘭の究
 理學は生れ得たる才ある人なり翁其人の才と
 を愛し務めて誘導し後々ハ直に良澤翁に託して
 此業を學せしと果して勉勵怠らず良澤も亦其人
 を知りて骨法を傳へし程なく彼書を解する
 事の大概を曉れり其際同僚淳庵桂川法眼又福智
 山侯杯に往来して此業を講究せり又大に志を興

し此上ハ西遊して長崎に至り直に彼通詞家に従
 ひ學ひ試ときよしをさしりし我も良澤も喜
 ひ許し汝壯年行矣勉めヨヤ其事を済さハ宿業益
 進むへしと慇懃せしより愈憤起して志を負爰
 決しとり然れとも素より貪生の事なれハ力の
 及さる事ともなり翁其志に感し専ら其力を助け
 んと思へしも翁も其去るハ生計としく思ふ程な
 らねハ力の及へるとけハ去れを助け且御同學と
 りし福知山侯も淺くらぬ恩遇ありて夕々て彼地
 といとり本木榮之進といへる通詞家に寄宿し教

を受け又彼に問ひ此に謀り油断なく修行して帰
 府より尔後江戸永住の人となる事を得たり
 叔嘗て編集し置く蘭学楷掇といふ書ありしを
 帰府の後藏板して同志に示せり此書出後世の
 志あるもの去れを見て新に憤悱し志を興せし
 亦少くらす此人を生し此等の書の出る事となり
 しも翁々本志を天の助け給ふの一にやと思ひし
 事なり

一此餘我門に出入せしもの内斯業を學ひ掛りし
 もの多かりけれとも或は又く都下は足を

むる去とかとく或は官途に羈れ或は生計に逐れ
 或は病身或は天死杯と皆さくく事を遂けし
 もなかりき然れども翁々去れを發起せしより
 其支派分流を生し出せしハ少くらす叔安永七八
 年の頃長崎より荒井庄十郎といへる男平賀源内
 々許に來れり去れハ西善三郎々舊の養子として
 政九郎といひて通詞の業を為せし人なり社中蘭
 学を興すの最初なれハ翁々宅へ招き淳庵など
 共ニサーメンスプラカを習ひし事もありし源
 内死せし後桂川家に寄食し其業を助け又福智山

炭へも出入りし炭の地理学の業も加功したり
 炭専ら地理学を好み給ひ庄十郎後ハ他家に在り
 泰西國説等の訳縮あり此人江戸へ下りて聊
 て森平右衛門に改名したり此人江戸へ下りて聊
 社中を誘致せさりしもあらざらん今ハ千古
 の人となれり

一津山炭の藩醫に宇田川玄随といへる男あり去れ
 ハ元来漢學に厚く博覽強記の人なり此業に志を
 興し玄澤よりて彼國書を習ひ其紹介して翁に
 淳庵へも往來し桂川君良澤へも漸く交を通し
 後山長崎前通詞家白川炭の家臣となりし石
 井恒右衛門といふ人杯へも出入りし彼の言語の

數々をも習ひし元秀キよて鐵根の人也へ其
 業大に進み一書を訳し内科撰要と題せる十八卷
 を著せり是れ簡約の書といへども本邦内科書新
 訳の始なり惜しむるに四十餘よりて泉路に趣け
 り此書訖後いさり漸
 全部の崩板なれり

一京師に小石元俊といへる醫師あり獨嘯菴の門人
 又て醫事志至て厚き男なり翁固より相識れる
 人よあらず彼れ始て解體新書を讀みて千古の説
 差ひし所を疑ひ親炙して斯書の著実なる
 其感し尔来深く去れを喜ひ翁へ書信を通して猶
 其解しつとき所を尋問せり天明五年の秋翁炭家
 又陪して其國に罷りし歸路上京せし時滞留の間

日夜来て問難しより其後ハ東遊し玄澤の僑居を
 主とし在留一年より近く毎々社中と此業を討論せ
 り蘭學としてハ為されとも帰京の後其塾に於て出
 入の諸生徒は鮮體新書を毎講して其实法を人
 び示せしむられ関西の人を誘致せしの一なり
 一大坂は橋本宗吉といふ男あり傘屋の紋より事を
 業として老親を養ひ世を営めりと不學なれと生
 来奇弋あるもの由へ土地の豪商とも見立て力を
 加へ江戸へ下して玄澤の門に入れとり僅の逗留
 の間出精し其大躰を學び帰坂の後も自ら勉めて

其業大に進み後ハ醫師となりて益此業を唱へ從
 遊の人も多く漸く譯書をも為し五畿七道山陽南
 海諸道の人を誘導し今に於けるいよく感なりと
 聞けり江戸へ来りしハ寛政の初年の事なり帰阪
 の最初右の元俊も彼ら志を助けて其業を勵まし
 めしとなり

一土浦侯の藩士は山村弋助といふ一奇士あり其叔
 父市川小左衛門を介として翁は蘭學の事を問ふ
 翁其ころ八年老て此業を以て悉く門人玄澤に託
 しされハ玄澤彼國文二十五字よりして教立たり

天性其戈備り殊ニ地學をよのミ専ら其筋を專精
 せーが白石先生の采覽異言を増訳重訂して十三
 卷の書を譯撰す栗山先生の推挙よりりて官へも
 内献せり其餘翻譯の内旨も奉りとりり其業も
 全うらすして即世せり惜むへー云ふへー萬國
 輿地の諸説ハ未と漢人の知らざる所のもの多し
 是れ蘭學の去るに至れるの功なり

恒石衛門名當光

一石井恒石衛門ハ長崎舊の訳官馬田清吉といふも
 のなりり其家業を他人へ遜りて江戸へ來り天
 明の中頃白川侯の家臣となれり侯其初めを知り

同、ニユース本草を和鮮せしめ十数卷の譯説成
 れり其業を卒へて是亦異客となれり稻村某
 といふ男取立ハルマ釋辭の書ハ全く此人の力
 頼れり此譯書ハ近來初學稽古の人々考閱の益
 ありといふ此人も舊職業を以て仕官せへり
 て東下せりハあらねども斯の如く隆盛の中へ
 來りし事ハ専ら此道の助けとなりと
 一桂川家の事ハ前にもいへるよとくなり甫周君ハ
 校群の俊才也へ元々和蘭の事にも略道し其名聲
 四方に走せ尤常ニ其業事の起ハ公上にも知し

召れし事なれハ時々西洋筋の事ハ和鮮御用も命
せられし趣なり其草稿其家ニハ有へし和蘭藥撰
海上備要方杯云ふ譯説の著書ありニ聞こも未だ
成熟の書を見せ年いよと六十ニ満まると千古の
人となり給へり

一因州侯の醫師稻村三伯といふ男あり其國ニ在り
て蘭學楷柁を見て憤發して江戸へ下り玄澤々門
を扣き此業を學び後ニ彼「ルマ」といふ人著せる
言辭の書を石井恒右衛門ニ依りて譯を受け十三
卷といふ和語解訳の書を編せり其始め石井へ介

をなし原書も借し與へたりと其初稿ハ宇田川玄
随岡田甫説といふもの加功して時々石井が許し
往來して成就せりと訂正の時ニ至りてハ他ニ力
を添へしものもありとも関けり後故ありて侯邸
を退き江州海上郡の邊ニ浪遊し遂ニ名を随鳴と
改め京師ニ在りて専ら此業を唱へし由今ハ古れ
も古人となれりと聞けり併し釋辭の書を企て成
せしハ初學者の爲し一功といふへし
一今の宇田川玄真初ハ安岡氏にて伊勢の人なり江
戸へ出でし岡田氏を冒し上といふ宇田川玄隨の

蘭學事略

天眞樓藏

漢學の弟子なりし由玄隨其才の固密なるを知りて蘭學を引導せんとの意ありて毎々玄澤へも導せしことありしとなり然るは玄隨一とせ疾駕を陪して其國に至りしあるは養家を辞し本姓安岡を復せし時玄真初て師命を命て玄澤を許し未り此學を習ふ事を請ふ蘭字の書方までハ玄隨より習ひ受けしと見へされハ為し蘭言譯語の一小冊を授けて寫さしめ又彼の局方の書を讀しむ日々往來し且寄食の事を乞ひければも其ころ家を支れる事ありて暫く同社嶺春泰が許し託て此頃

春泰疾んで日々篤し終に物故せり故に此後玄澤甫周君へ謀りて同所へ託して曰く此男蘭學執心より其依る所なきを憂ふ為し去れを取扱ひ給らば往々君の業を助くべきものなるを説く君直に諾して去れより同家に入塾せる去となりぬ其際も玄澤がもと往來して譯法を問ふ事あるなり本此男蘭説の實際に心酔していふ吾他は望む所なし隨意に此業の修行出来るの師塾ならハ何方へも寄宿なきときいふ宿願なりそれゆへ桂川家へ託せしことなり然るは其ころ

同家ハ官務と治業と繁多よりて彼々素志を達するこゝ能ハざるを玄澤より訴る去と繁くなり一日玄澤翁より此事を語る翁其去るハ次第より専門の療術寸暇なく素業を勤むへき暇とてハなき身となりとり然れども翁ハ素より此道は志深かりけれハ猶益、其道を開ききの志止りなく解牒新書成就の後も彼「イステル」外科書の訳文より手をかけ金瘡瘡瘍の諸篇ハ草を起して數卷の稿ハ出来たりいり其頃度々の病は羅りり傍人も諫め去れハ此業勤勉の崇りをなす所なれハ少間廢すべし

いひ九_五玄澤等もひとすら心志を放散し偏り老を養ふべし不肖といへども其業吾去れり代るべしともいひ且ハ次第より老行く年なれハ中々大業遂べき氣根もなく其後ハ令り中絶しとりけれとも其本志の己ミヤとく數年の間見あとり一蘭書の分ハ大部の物といへども力の及へる程ハ費へを厭す購ひ求め相應よりハ藏書も集りとり此學を事とせんとするもの誰よりあれ其志ハありても書籍より乏しき時ハ事成らむと思ひ自ら讀より暇あるすとも往く子弟等ハもとより志ある人より借典へ

て此道開くるよめの裨益とるべしと思ひ数十卷
 を藏しとり扱同く八年若く此道又志篤き人を
 見出し別よ一女よ妻し養子とす此業を遂きせ
 我醫道の未と開ざして未と足らざる所を開きて
 之を補綴し諸民の疾苦を廣濟なるときもの朝
 暮心よりけし折なれば幸よ玄真ある去とを喜ひ
 即ち去れを招き其志を問し其云ふ迎玄澤か申
 せし違はすよりて翁が家よ迎へ父子の契を結
 ひとり玄真も其意を得て深く喜ひ我家の藏書を
 自在よ取扱ひ日夜怠らぬ學ひ黽勉一うとならす

やもすれハ夜を徹する事もあり其精力の斯る
 りしゆへ進める事も又速よして其功昔日よ倍せ
 り翁の喜ひも亦知るべし志ありければ其頃
 ハ年弱き時なれば彼よ専ら出精すれば亦氣
 の移りやすき容氣盛の寂中なれば身持至て放蕩
 となり志を異見をも加へされとも愈慕りて已
 ざるよより惜むべきの戈子よハ知りされとも捨
 置ハ如何なる事をや仕出し侯家の御名を汚すべ
 き事もあるべし老の身の其心一日も易ららず
 己むことを得ず離縁して長く交を絶たり

一 去れよよりて同社も交を通せず彼も頼之少き身
 となりて甚と窮厄してありよ去るら其好む
 所の業ハ廢せさりよを彼稻村なる者採ひそらよ
 見次せよよなり其際稻村等我男伯玄よ内々謀
 りて藏書中内科一二部の書を備して譯せよめな
 んどよ其窮を凌せよといふこと後よ聞より遂
 よハ自新して志を改めより聞より亦其頃稻村
 金よ「ハル」釋辞の書ハ彼ら加功して其業を助
 成せり

一二三年過て後宇田川玄随病よよりて物故せり其

嗣子なきを以て私く養子を求めとり去るよ於て
 稻村氏仲立して宇田川の家を継せより前よいへ
 り如く玄随へハ去らどりの縁もあり其なより
 後よいへとも今亡父となり一人の志を継ぎ其身
 も志す所の本意を達せりといふへ爾後益々專精
 して数多の譯説をも為し醫範提綱といふものを
 開板し既よ一家の事成りぬ其行ひ改り其志立ち
 上よて宇田川姓も継し事なれハ再び翁へも交
 通をゆるし給れと伯玄玄澤等ら申よまらせ然る
 上ハ長く惡之遠くへきよハあらまとして出入を許

一故の如く相親之玄真翁は仕ること師父の如く
なれハ翁も亦彼を見る者と子の如く是るの昔も
復せり

一玄澤ハ先き其名風く成りて近頃官府よりして
新に御藏和蘭の書翻譯の台命を蒙りしに至り
ぬ昔翁の輩の假初の企し學業なりし今翁の世
はありて顕らるるかゝる嚴命を蒙り奉りしハ
冥加にもありとく翁の宿世の願満足せりとい
ふへし何卒生民廣濟の為しと思ひ立ちて取付き
るとき此事は刻苦せし創業の功終に空しからず

續ひて玄真も亦同様の命を蒙り相俱ふ此は徒
事せる衰となれり仰ひて感戴するに堪へざる所
なり尤も去れ他にもあらむ翁の誘導せし我門の徒
等として此盛華にあつられる老々身の本懐亦何
をう去れし加ん翁の高龄を錫りし天録もあり
とく當時艸葉の蔭と諱名せられし我身今もなを
聖代よむらへて其全備を見せしめ給ふと限
りなきの恩光昊天の冥感と云あらん
一此餘玄澤玄真の門より出し青藍の器もある
よしなれとも翁の子の子の孫彦として委し知

る所はあらす三都の間諸侯の國々分處するも
多々るへ

一菅長崎にて西善三郎ハ「マリーリン」の釋辞書を全部
翻譯せんといふと聞くと手初迄にて事成らすと
聞けり明和安永の頃はや本木榮之進といふ人一
二の天文曆説の譯書有とあり其餘ハ聞く所なく
此人の弟子は志築忠次郎といへる一譯士ありき
性多病として早く其職を辞し他へ遷り本姓中野
に復して退隱し病を以て世人の交通を謝し獨學
んて専ら蘭書に耽り群籍は目をきらし其中彼文

科の書を講明しとりとなり文化の初年吉雄六次
郎馬場千之助といふもの其門に入りて彼属文
並に文章法格等の要を傳へしとなり此千之助ハ
今ハ佐十郎と改名し先年臨時の御用にて江戸に
召寄られし数年在留し當時御家人に召出され
永住の人となり専ら蘭書和解の御用を勤め此學
を好めるもの皆其讀法を傳ふる事となり我子
弟孫子其教を受るべしといふ各々其真法を得て
正譯も成就すへし叔忠次郎ハ本邦和蘭通詞と
いへる名ありてより前後の一人なるへしとなり

若し此人退隱せしめて職をばらば却てらくまて
 ばハ至らざるへきは是れ或ハ江戸よて我社の師
 友をなくして推て彼邦書を讀出せる事の始り
 ば彼人も憤發せるの爲す所歎とも思はる是亦昇
 平日久しく去れらの事も世に開へきの氣運とい
 ふへし

一滴の油をれを廣き池水の内に點すれハ散りて
 満池に及ぶとやさある如く其初前野良澤中川
 淳菴翁と三人申合せ假初と思ひ付し事五十年よ
 近き年月を経て此學海内に及ぶ其所以彼所以四方

流布し年毎に譯説の書も出るやうに聞けり去
 れハ一犬実を吠れハ萬犬虚を吠るの類よて其中
 又ハよきもあしきもあるへけれともそれハ姑く
 申よ及すらくも長命すれハ今の如く又開る事を
 聞たりと一とハ喜ひ一とハ驚きぬ今此業を
 主張する人は是よての事を種々の聞傳へ語り傳へ
 を誤り唱ふるも多しと見ゆれハ跡先なるら覺居
 たりし昔語をらくハ書捨ぬ

一にへすくも翁ハ殊よ喜ぶ此道開けをハ千百年の
 後々の醫家真術を得て生民救済の洪益あるべし

と手足舞踏雀躍し堪へざる所なり翁幸ふ天壽を
 長して此學の開けりより初より自ら知りて今
 の斯く隆盛に至りてを見るハ去れ我身は備り
 幸なりとのいふへらす伏して考ふは其実ハ
 恭く太平の餘化より出り所なり世は篤好學志の
 人ありともなんを戦亂干戈の間より去れを創
 建し此盛舉に及ぶの暇あらんや恐多くも今茲文
 化十二年乙亥ハふとらの山の おんこ 大御神二百と世
 の御神忌にあらせ給ふ此 大御神の天下太
 平に一統し給ひ御恩澤数ならぬ翁々輩よて加

り被り奉りくましくすこくして 神徳の日の光照
 りそへ給ひ御徳をりとおそれたりここ仰ま
 ても猶多しある御事なり其卯月去れを手録し
 て玄澤大槻氏へ贈りぬ翁次第は老疲れぬれハ此
 後より長事記すへとも覺すよと世に在るの
 絶筆なりと知りて書つゝけりなり跡先きなる事
 ハよきよ訂正し繕寫しなハ我孫子等よも見せよ
 りハ十三齡九幸翁漫書す

玄白先生文化五年四月十七日歿年八十五

大槻文彦藏

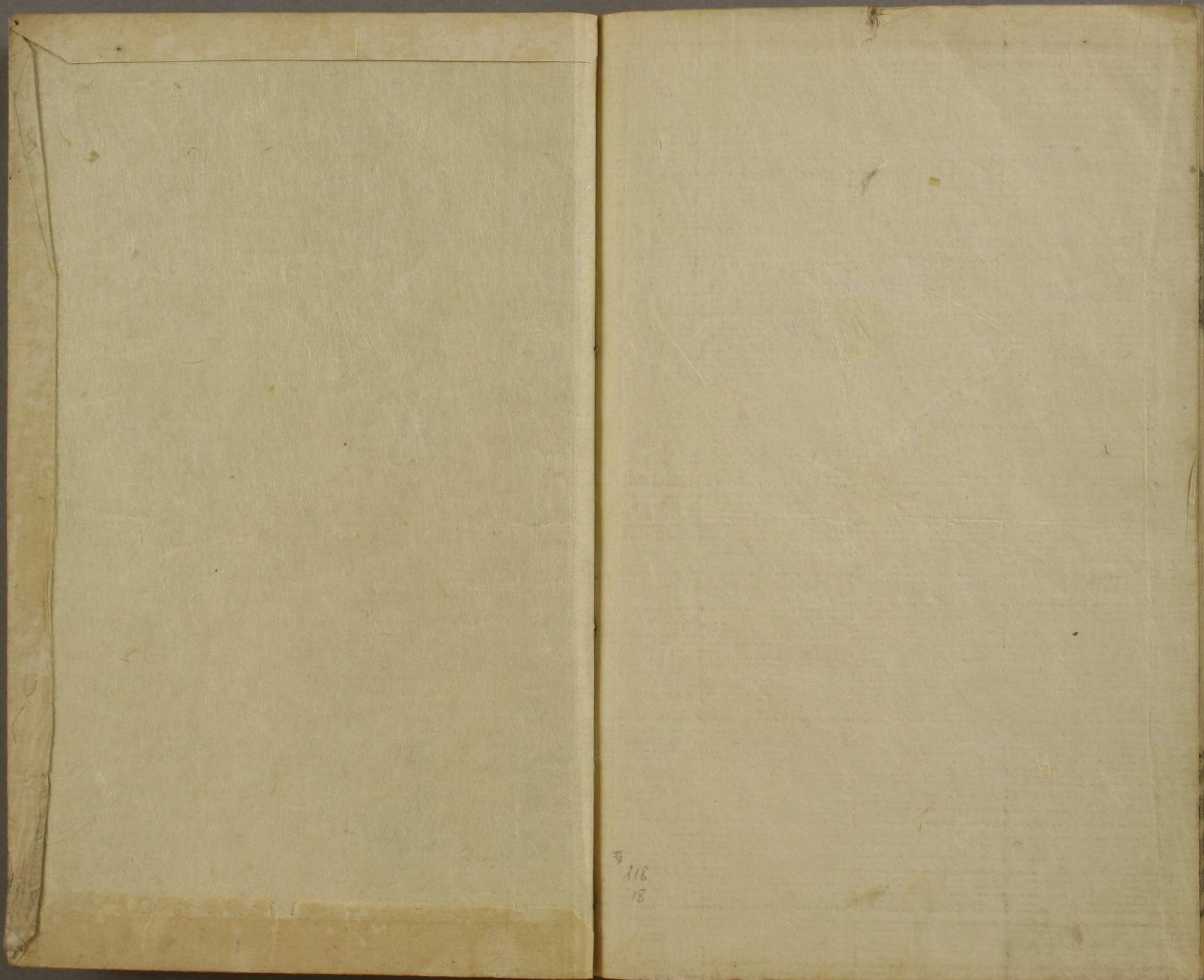
蘭學事始卷二終

廣
三
好

〇二十六

天
身
林
林

大
規
文
庫



116
18

